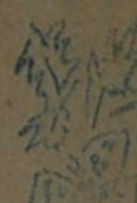
春陽會ニュース



二つの課題

中谷泰

「作家と公の立場から……！」

作家が一つ選ばされて、再び問題がわれ〳〵の現実生活に入る。

先輩加山四郎の言葉に、その後見公的経験を通えて、ここで又、後、終戦との思考の生活が始まらんとする。

お互いの心の中で、新しい課題を持ち出そうか、私は私なりに、この春のこれから時迫験から、二つの課題に就いて、敢えられた。これは各面の私達の共験しなければならない課題でもあるのだ。

その一つはモダニズムの問題であり、他のそれは、趣味性の問題であると私は云う。

モダニズムの問題に就いては、一部風壇的に討論されている事だし、結論が参されている。即ち「モダニズムはすでにない絵画でしかない」と。私のここで云うモダニズムとは、二つのイズムとしてでなく、そこには世界観もない、単に、現象的なものを指すのであるが、この モダニズムと云う言葉に、私達が捉われていけないのは、単にモードと云ってもよかろう。

この現象的なモードと云うものは、乎く近代美術に向って発展して行くコースとは別に、私達の、今日的な、生活周囲に満ちている植民地的な、主体性のないモードであり、云わばわれ〳〵の芸術分野以外のモードであるのに、絶えず私達の美術的現実の中に飛び込もうとするモダニズムである。

即ち近代精神と近代芸術とをはっきり区別されなければならない。

このモードはわれ〳〵の生活感覚の面で直ちに眼につくものやは物象の客観性を誇張して、作家の麻痺状態に於ける現象の取り扱い方がいぶ〳〵この様な一種の効果を引き起す場合である。しかも、この感覚効果と云うものが本質的な嗜好に転化して、ついに単純性に陥ち入って行く危険をわか〳〵は意識しなければならない。

この モダニズムの傾向は、新制作の大部分の作家に見受けられる。そこには感覚的な、型式の模倣以外の意識から生れた表現がない。従って偶然のもたらした型式にすぎない。

客観的現実からの逃げ道に、今一つの趣味性と云う問題がある。近代美術はわれ〳〵にあくまで物象の客観的……更に自然主義以後の印象派的教養を身につけた今日の作家は、この物象の現実性との対決を前にして、もろくも崩れ去りを生じ、最後の隠れ場所を求めてさまよった。

この趣味性は関西の作家の大変数に見受けられる。しかも、物象の絵画的現実性の表現ではなく、その変化、文学的方法時代的描写に終っている。

× ×

これら二つの傾向は、わが会に強烈に反映されている。趣味性の問題は、この前の展覧会の絵画に於ける[illegible]

[illegible]

[illegible]